

2024 AUTOBACS SUPER GT Rd.3 SUZUKA GT 3Hours RACE REPORT



SUPER GT 2024 第3戦鈴鹿 レースレポート

開催日：予選 6月1日／決勝 6月2日

開催地：鈴鹿サーキット

予選レポート

6月1日の鈴鹿サーキットは、前日の雨がすっかりと消えた好天。予選が始まる直前の気温は、少し暑さを感じる26℃、路面温度は45℃となった。GT300のエントリーは27台で、予選は開幕戦岡山と第2戦富士によるランキングボードによって振り分けられる。9号車「PACIFIC ぶいすぽっ NAC AMG」は、B組に振り分けられての予選となる。A組とB組の出走順はすでに第2戦富士の優

勝記者会見時のクジ引きにより決定しており、第3戦鈴鹿の予選Q1はB組の走行から始まることとなっている。

15時に予選Q1のB組からスタート。「PACIFIC ぶいすぽっ NAC AMG」の予選Q1を担当するドライバーは畠林勇佑選手。これまでは阪口良平選手がQ1を担当していたが、この鈴鹿では予選に



対する作戦を大きく変えてきた。しかしながらマシントラブルにより、予選日午前中のフリー走行を満足に走ることが出来ていなかったために不安の残るコースインとなったことは否めない。コースオープンとともにコースインし、念入りにタイヤを温めながら徐々にタイムを上げていく。そしてQ1終了間際に1分59秒台556を叩き出し、B組5番手というポジションで終了。このタイムはヨコハマタイヤを履いた「Mercedes AMG GT3」の中では最速で、今シーズン初のQ2でのUpper16のグループ1への進出を果たした。

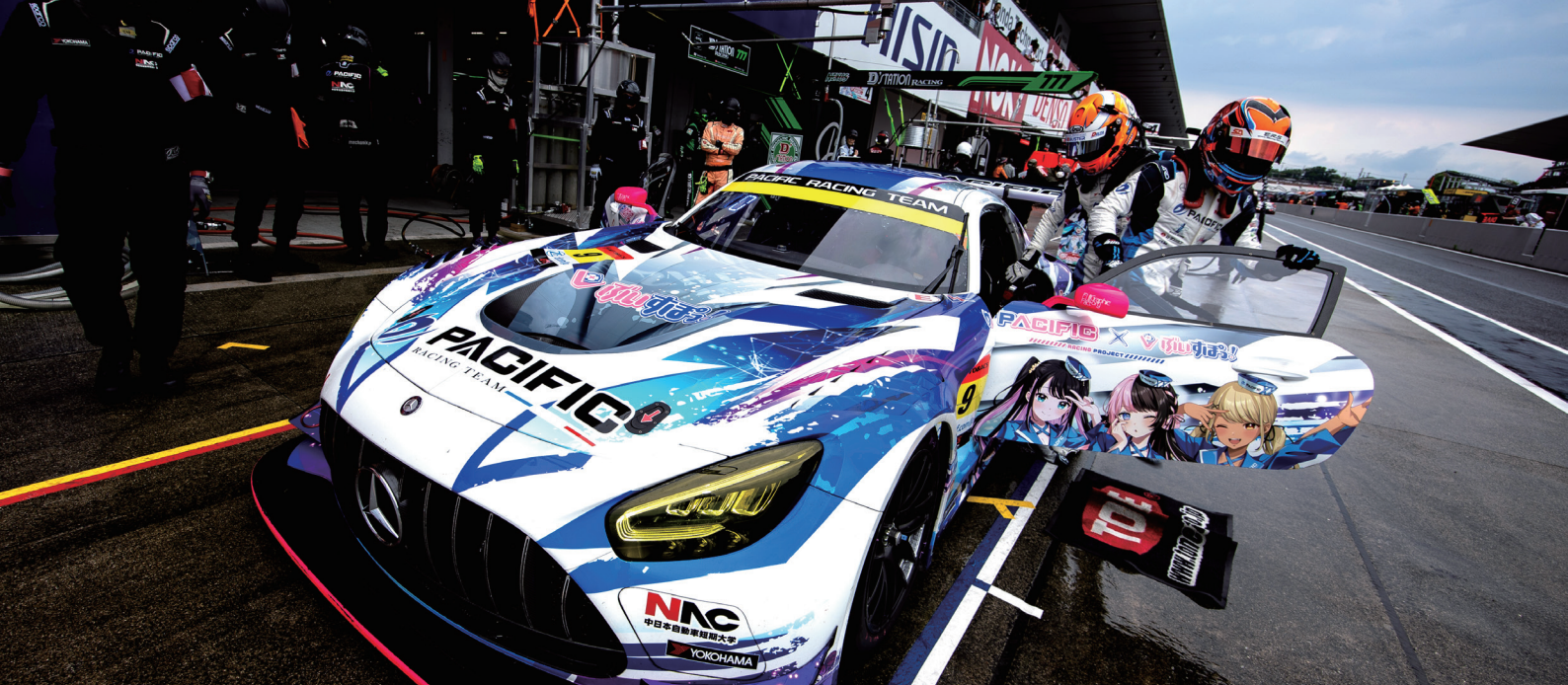
予選Q2、そしてスタートラップにまで同じタイ

ヤを使うことはこれまでと同じ。また、第2戦富士と同じく3時間のタイムレースとなり、予想されるレース距離は510kmを超える。この予選からロングディスタンスレースが始まっているとも言えるのだ。そのためのタイヤづくりという面もこの予選でのミッションとなる。

予選Q2グループ1の走行が、16時11分から開始された。気温は25℃と少し下がってはいるが、路面温度は43℃と思ったよりも下がっていない。9号車「PACIFIC ぶいすぽっ NAC AMG」のドライブは阪口良平選手。今回の鈴鹿では、タイヤメーカーに関係なく「Mercedes AMG GT3」がタイムを伸ばせないという状況であり、その状況下であっても阪口選手はベストを尽くし、最後の最後で2分0秒860というタイムを記録。グループ1の中では合算タイムで14番手のタイムとなった。

この予選Q2グループ2の結果により、グループ1から2台のマシンが順位の入れ替えとなった。それにより9号車「PACIFIC ぶいすぽっ NAC AMG」は、GT300の17番グリッドからの決勝スタートとなった。





決勝レポート

6月2日、第3戦決勝日の鈴鹿サーキットには約2万5千人という観衆が詰めかけた。午前中から小雨が降ったりやんだりという天候の中で、ウォームアップ走行やスタート進行が行われることとなる。しかしながら、スタート間際でもウェット宣言が出されるような路面状況ではなく、各マシン共にスリックタイヤを装着しスタートを待っていた。スタート時の気温は25℃、路面温度は34℃で、陽が出ていないだけに路面温度は低いと言わざるを得ない。

そんな中、13時30分に三重県警察の白バイ7台、パトロールカー4台が先導しての交通安全啓発活動のパレードラップからフォーメーションラップ。そしていよいよ、SUPER GT 第3戦 鈴鹿決勝3時間レースが始まった。

GT300の17番グリッドから上位を目指す9号車「PACIFIC ふいすぽっ NAC AMG」のスタートドライバーは、第2戦富士から参戦のルーキー藤原優汰選手。混沌とするスタートラップをそつなくこ

なすも、S字コーナー手前で1つ順位を落としてしまう。その後は安定して周回を重ねながら、26周と言う早めのタイミングでピットイン。富林選手へと交代する。この際にタイヤを4本とも交換するが、天候が不安定であったためにアウトラップでの温めが長くなる新品タイヤを避け、当初よりグリップが出やすい10周ほど走ったUSEDタイヤを選択した。

富林選手は、2分2秒台で周回を重ねていくが、これ以上のタイムがなかなか出てこない。むしろグリップ力の低下が早く来てしまい、なかなか攻め込むところまでの走りにつなげることが出来にくい状況となっていた。そんな状況下でも、極力順位を下げることなくピットイン。最後のスティントの阪口選手まで繋いでいった。

そして最終スティントの阪口選手は4本のタイヤを全て新品とし、19番手という順位でレースに復帰する。この順位から前に行くライバルを抜いていくために、周回遅れのライバルなどと絡みな



がかなり激しいバトルが展開されていった。タイヤグリップが復活してきた後の9号車「PACIFIC ぶいすぽっ NAC AMG」は本来の力を取り戻してきたようで、ASTEMOコーナーなどでは前走るライバルに猛チャージで襲いかかる場面を魅せるなど、胸のすく戦いぶりを見せた。

そして、一時は19位まで落ちていた順位も予選順位と同じ17位まで戻してのチェッカーとなり、最終スティントでの様々なチャレンジによりコーナーの多い鈴鹿でも手ごたえをつかんだという。

次戦は「Mercedes AMG GT3」が得意とされ

る、ストレートの長い富士スピードウェイでの350kmレースとなる。時間制から距離制とレースのフォーマットは変わるが、これまでの3戦で培ったデータをいよいよ勝利につなげるべく戦う一戦となる。ここはポイント獲得を期待したい。



Comment



エントラント代表 神野元樹



天候の読みが難しいレースでしたが、アクシデントなくレースを終える事が出来、次へのデータも掴む事が出来た貴重な一戦となりました。チーム力が上がって来ているので、今後のレースに期待が持てます。車両のパフォーマンスも悪くないので、万全な体制で次戦Rd.4富士戦に挑みたいと思います。
鈴鹿戦も沢山のご声援、本当に有難う御座いました。

阪口良平 選手

最終スティントでかなり下の順位からのレース復帰でしたが、レースの終盤でタイヤを含めてやっと本来のマシンポテンシャルを引き出せてきたので、次の富士へとつながるチャレンジをしながらのレースをしていきました。その中で、バトルとなっても前に行ける強いクルマとしての引き出しを増やせたと思います。



富林勇佑 選手



第2スティントでは、天候の読みを入れたタイヤチョイスをしたはずでしたが、雨がすぐに止んでしまい読みを外してしまったのがこの順位の原因だと思います。ただし、タイヤのグリップが足りない状況でもアクシデントなく自分のスティントを走り切ることが出来たのはマシン自体の方向性に間違いはない、という印象を持っています。

藤原優汰 選手

初めてスタートを担当しましたが、意外と落ち着いてスタートラップを走ることが出来ました。ローリングスタートということもあって、ある程度スピードが乗った状態でのスタートは、これまで自分が走っていたFIA-F4のスタンディングスタートよりも思い切って行けると思いました。

